

玉川大学 経営工学科

幼稚園から大学に至る一貫教育で知られる玉川学園は都心から西へ30km, なだらかな起伏の多摩丘陵にまたがる地に約56万m²にわたって展開されている。緑の多い自然公園とも呼べる中に玉川大学が位置する。大学には文・農および工学部と芸術専攻科があり、工学部は機械・電子・情報通信・経営工学科の4学科からなる。

経営工学科は1学年70~100名の規模で、私学としては小人数制と表現してよいであろう。研究室については、講座制が採用されておらず、同じ部屋に異なる研究分野の教員が合部屋となっていることもあるので、研究室単位の紹介は困難である。卒業研究は、大体の目安として、講師に4~6名、助教授に6~8名、教授に8~10名の学生が割りあてられるが、各自自分のゼミ生だけを重点的に面倒みればよいのでありがたい点もある。しかし知識、研究技術の伝達・継承ができにくく、油断すると孤立した研究になりかねない。そこで、他大学・研究所との積極的協同研究や産学共同など、常に刺激を求めながら自己研鑽することが不可欠となっている。

座学の講座については、専門教員16名対1学年80名または半分の40名で開講されるので、学生の目を見ながらマーケット・インの講義が可能である。

管理する対象としてのQ(品質), C(原価), D(納期), S(安全)の各々についての管理技術講座がバランスよく構成されているが、管理する対象が実在するため、実学的な傾向を強く押しだしており、実験・実習に力を入れたカリキュラムを編成している。その中でも本学の大きな特徴の1つに夏期工場実習がある。第3年次および4年次の2年間、夏休みの1カ月間を利用して工場における管理技術実践の場が必修として与えられている。1社に2名の学生が3年と4年とをペアにして割りふられ、3年生に対する指導が上級生から行なわれ、上下の関係を強める役割も持っている。教員側の指導体制としては、1社に対し2名の教員がペアとなって3~4回企業に出かけ学生の指導とともに、企業側の相談のったり、企業でかかえる問題の把握をしたり、産学協同研究の一面を担ったりもしている。

品質管理の導入法、不良低減、作業研究、稼働分析、工程分析、原価管理システムの構築、事務分析、安全管理などの他、近ごろでは、サービス産業における要求品

質表の整理やデータ解析なども行なわれている。

各教員は担当企業を約10社、指導学生20名をもつことになり、学生にも教員にもかなりのロードにはなっているが、その有効性を考えると、積極的に目玉として推進する方向はゆるがない。実習結果は、企業内において成果発表会が開かれるだけでなく、大学においても発表会があり、回を重ねるごとに発表の仕方も堂に入っていくプロセスが目に見えて、これも大切な自己主張法の教育であることがわかる。(谷津 進)

事例研究の原稿募集!

ORの特徴は実践にあるといわれています。実際的な応用をぬきにした理論ということはORでは考えられません。本誌でも以前から会員の皆様からの事例研究の報告をお願いしてきましたが、まだ十分な成果をあげているとはいえません。

もっと気軽に、「この問題はこう処理したが、もっとよい方法はないか」、「やってみたけどなかなかうまくいかない」というような事例や問題提起をどしどししていただきたいと思います。会員同士の知恵の交換というつもりでこの欄へのご投稿をお願いします。

投稿要領: 学会原稿用紙36枚(25字×12行)以内
(図・表を含む) 投稿先はOR学会事務局OR誌編集委員会宛。

尚、原稿の他コピーを2部添付して下さい。

(OR誌編集委員会)